

第48回(2008—09)キューバ国内野球リーグ大会を振り返って

カルロス・イグレシアス (翻訳：浦野保範)

第48回全国野球シリーズの最終戦で「ラ・アバナ」チームは、投手陣の素晴らしい活躍で、ビジャ・クララ・チームを4対1で破り、球団創設37年目にして初の栄冠に輝いた。

ラ・アバナは、首都ハバナの西300kmにあるライバル球団サンタ・クララのホームグラウンド「アウグスト・セサル・サンディーノ」球場で、新チャンピオンとなった。その勝利は格別の味がしたに違いない。栄冠は、ハバナの投手陣全員の手で勝ちえたものだ。その中でもレギュラーシーズン後に5勝し、最終戦でも勝ち投手となった22歳のミゲル・アルフレド・ゴンサーレスの働きが際立っている。ゴンサーレスは、通算13勝を上げた。この数字を不吉とする迷信深い人々もいるだろうが、彼が将来、キューバ代表チームの一員となる日が、大きく近づいたのである。昨シーズンのサンティアゴ・チームのオルマニ・ロメロとノルヘ・L・ベラ、ビジャ・クララ・チームのウラジミール・エルナンデスと同じ状況だ。



試合の流れを決定づけたのは、ゴンサーレスが、両チーム無得点で迎えた4回のノーアウト満塁を切り抜けたことで、これからも長く語り継がれるであろう。このシリーズは、特別なもので、1,100万人のキューバ国民全員が野球の監督となり、狂わんばかりに熱狂したシリーズとなった。

今シーズンを振り返ると、評価は、特異な意見から特有の見解までさまざまある。この第48回国内シリーズのまず大きな特徴の一つは、第2回ワールド・ベースボール・クラシックに参加するキューバ代表チームの練習期間が1ヶ月以上設けられたため、この期間を境にシリーズが、前後の2期に分割されたことである。

前半戦、17戦全勝のビジャ・クララが負けを知らないでこのまま勝ち進むかと思われた。首都のメトロポリタノスは、チームの方針で有力選手をインドゥストゥリアレスに放出しマタンサス・チームと合併したが、これは再び栄冠を獲得し、輝けるシーズンとするためだった。しかし、その目的は達せられなかった。

前年度のチャンピオンチームのサンティアゴ・デ・クーバは、レギュラーシーズンを勝ち抜き、選抜シリーズまでは進んだが、ビジャ・クララにあっけなく敗退しシーズンを終えた。このビジャ・クララも、レギュラーシーズン最多勝チームのシエゴ・デ・アピラに

粉碎された。インドゥストゥリアレスも、期待とは大きくかけ離れた結果に終わった。新人監督のヘルマン・メサは、負傷者や離脱者によって、十分力が発揮できなかった。サンクティ・スピリトゥスは、所属選手にはキューバ代表チームの選手も何人か含まれているが、往年の投手陣とは異なり、良い成績は残せなかった。「ライオンズ」とも呼ばれるインドゥストゥリアレスも、「雄鶏」の別名を持つサンクティ・スピリトゥスも、これまでにない最悪のシーズンに終わった。

第2回ワールド・ベースボール・クラシックで、キューバ代表チームが敗退してから、後半戦は、キューバ国内リーグは、喪に服したようになった。スタンドには空席が目立ち、キューバの亜熱帯気候にもかかわらず、球場の雰囲気は冷たかった。



グラウンドでは、各チームの投手陣が次々と崩壊する中で、ラ・アバナは例外とも言える素晴らしい働きを示した。「野球は、ピッチャーによって勝敗の75%が左右される」との仮説が再び息を吹き返した思いがした。数字が全てを物語っている。

全投手陣の平均防御率は5.3と異常な数値を示している。一方、打撃陣は1試合平均4.1得点し、平均打率3割1厘と途方もない数値を残した。

したがって逆説的に、ラ・アバナは、チャンピオンとなったのである。まさしく投手陣の素晴らしい活躍にあったといえる。ユリエスキ・ゴンサーレス、ヤディエル・ペドロソ、ホンデル・マルティネス、そして何よりも期待されていなかった最終戦のミゲル・アルフレド・ゴンサーレスがヒーローといえる。このチームは、才能ある熟練監督エステバン・ロンビージョが指揮を執り、かつては県代表のピッチャーであったハビエル・ガルベスがピッチング・コーチを務めている。

多くの悪かった投手陣の中の例外として、25セーブポイントを稼いだシエゴ・デ・アビラのストッパー、ブラディミール・ガルシアの活躍が挙げられる。しかし、彼は、レギュラーシーズン後のビジャ・クララとの一戦では経験不足を露呈してしまった。特筆すべき投手としてピナル・デル・リオを代表する人気のベテラン右腕ペドロ・ルイス・ラソがいる。彼は、長い野球人生で既に300勝に到達したが、この1年では往年の活躍が見られず、栄光のキャリアの幕引きが近づいているように思われる。

戦力外となる選手はリストに溢れており、多くのチームで新人をマイナー・リーグから引き上げることになる。しかし、こうして多くの新人、あるいは若手選手が経験を積んで伸びてくるのである。ミゲル・アルフレド・ゴンサーレス以外の若手の中で、目立つのは、

ビジャ・クララのフレディー・アシエル・アルバレスで、キューバ代表チームの扉に手が掛かっている状態といえる。

第48回国内シリーズは、レギュラーシーズンを通して全てのチームが打撃優位の結果を残した。81名の選手が規定打席数の243に達した時点で、平均打率が3割を超えた。投手陣は、15,000得点を許したが、そのうち1,292得点は逆転打であり、球場のピッチャー・マウンド上の投手には悪夢となった。

打撃優位には、守備の乱れも影響した。キューバ野球の特徴であった固い守備は砂上の楼閣のように崩壊し、1試合平均のエラーは2.16を数えた。シーズン中にそれぞれの守備位置でタイトルホルダーの選手が生まれたが、好調な打撃が目立った。



サンティアゴのキャッチャー、ロランド・メリーニョは打率3割4分9厘、24本塁打、84打点をマークした。ラス・トゥナスのファースト、ホワン・カルロス・ペドロソは26本塁打、75打点をマークした。サンティアゴのセカンド、エクトル・オリベラは71打点を叩きだし、復活した。ホット・コーナーでは、サンクティ・スピリトゥスのユリエスキ・グリエルとピナル・デル・リオのミチュエル・エンリケスが再び争った。イスラ・デ・フベントウの指名打者は4割を超える打率で2回目の首位打者となった。サンクティ・スピリトゥスの指名打者は、3割9分9厘、打点90であった。しかし、丸太のような腕を持ったグランマの外野手アルフレド・デスパイネをしのぐ選手はいない。32本塁打を記録し、前回の第47回国内リーグでマークしたサンティアゴのアレクセイ・ベルの31本を超えた。

しかし、キューバのバッターは昔からの過りを今もひきずり、国内の素晴らしいコーチの評判に汚点を付けているようだ。ファースト・ストライクは打たず、余りにも待ち過ぎることが多いのだ。もう一つ欠けていることは、バント。バントは、試合の重要なポイントでは有利に展開できる作戦だが、少ししか使われていない。

シーズン中、16チームの外野手は153人いたが、デスパイネ以外で語る価値のある選手はデスパイネの同僚のジョエンニス・セスペデスが挙げられる。打率6割、24本塁打を記録した。グアンタナモのヒオルビス・ドゥベルヘルは打率3割8分6厘、123安打、16本塁打、73打点をマークした。

専門家によっては、オルギンのレリス・アギレラを最優秀指名打者に選ぶものもいた。打率5割7分9厘、17本塁打、61打点を残した。レギュラーシーズンを通しての優秀投手

は、最多勝、および防御率と三振奪取数 2 位のピナル・デル・リオの右腕ユニエスキ・マヤであった。左腕ではオルギンのアロルディス・チャップマンが奪三振 130 個を記録した。マイケル・フォルチは防御率 2.69 を記録した。

キューバでは新人王の基準は詳しく定められておらず、今シーズン、マイナー・リーグから数多くの新人が上がってきたが、定着したものは少なかった。キューバでは、以前に少なくとも 1 試合でも出場経験があると不当にも新人選手とみなされないが、その例に当たるのがグアンタナモのミシェル・ゴルグエの場合で、彼は、今シーズンは打撃 3 割 1 厘、



16 本塁打、49 打点を記録した。しかし去年はサンティアゴで僅か 14 回打席に立っただけであった。次の国内大会までにこの基準を明確にすることが必要であろう。

全ての逆説や矛盾にもかかわらず、今シーズンは、キューバ野球の監督とも云える 1,100 万人の国民やシーズンを報道するいろいろなマスコミに熱気を呼び起こした。かくして、野球機構の改革から各チームへの改造まで、いろいろな新たな提案が寄せられている。

その第一は、現行の国内リーグ戦後に新たなシリーズをつくり、「優秀な選手を結集し」、国際試合に向けて最強のナショナルチーム編成することができるようにすることである。「結集」は多くの人々にとって鍵となる言葉である。特定の県では能力ある選手が十分輩出せず、結果も伝統的に思わしくないという考えから、県単位のチームの編成はやめて、優秀な選手を結集する必要がある。

各チームのデーターを分析するために大量に情報科学を使用したシーズンした後で、各インニングにファンの情熱をより掻き立てる目的のためにこれらの資料を広く流布するような余分なことはしてはならない。

選手、熱烈なファン、そして各地域の機構が検討したあとで、各県の名前だけでなく、選抜された選手を指名するためにチーム名を公式に採用することを主張する人びともいる。

キューバ野球は、「陰陽」、良いところもあり、悪いところもあるという状況の影響を受けた全盛期を終えた。今や、ヨーロッパを舞台にしたワールドカップの準備が待っている。

しかしながら、本当の課題は、要求が高い熱狂的なキューバのファンを楽しませることであり、次の 11 月からスタートする第 49 回全国シリーズの「プレーボール！」の声を聞く瞬間から始まる。ラ・アバナチームは初めての優勝から連覇ができるのか？優れた投手

陣は新たな挑戦に勝利することができるのだろうか？